

徳島県犬伏蔵佐谷出土の瓦経片の復原と考察(二)

——『妙法蓮華経』「巻第一」について——

はじめに

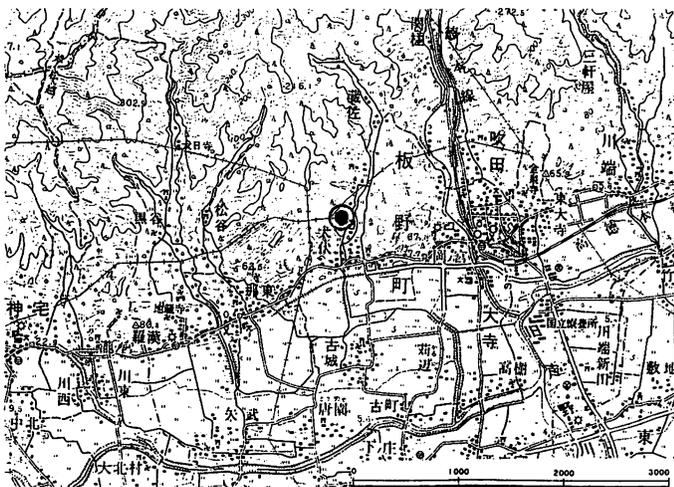
阿波国を流れる吉野川の左岸、板野郡板野町犬伏字蔵佐谷の旧釈迦堂跡は多量の瓦経が出土した遺跡として昭和三十五年四月五日、徳島県文化財保護条例によって史跡に指定されている。また、出土した瓦経の中に「天仁二年七月五日書」の紀年銘があり、その資料的価値は極めて高く、これらの瓦経は昭和三十三年七月十八日付で、徳島県の文化財保護に関する条例の第八条の規定によって、徳島県教育委員会より有形文化財として指定されている。ただ、これは犬伏出土の瓦経の一部であって、故浪花勇次郎氏の旧蔵品が、現在阿南市長生町善昌寺西室美術館(館長下山隆明師)に継承されている。そのほか、すでに散逸しているものが多数あるので、これらの資料を出来るだけ集め、犬伏瓦経の復原を試みる作業を行ってきた。

浪花氏はすでに鬼籍に入られたが、御生前の友好もあり、その遺志をうけて逐次まとまったものを発表してきた。西室苑所蔵のものについて

は昭和五十四年七月五日に現地調査を行ったが、平成七年七月二十九日再度参上して補足の調査を実施した。このうち『妙法蓮華経』の「序品」に関する部分がまとまったので、その復原と考察を試みることにした。

復原と考察

まず、①をみる



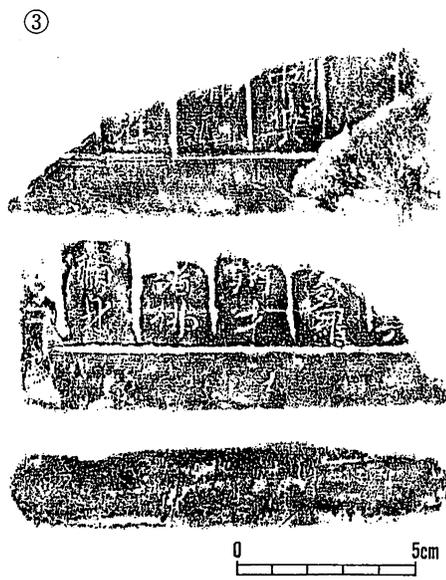
大伏瓦経塚位置図(国土地理院) (川島図幅)

網干善教

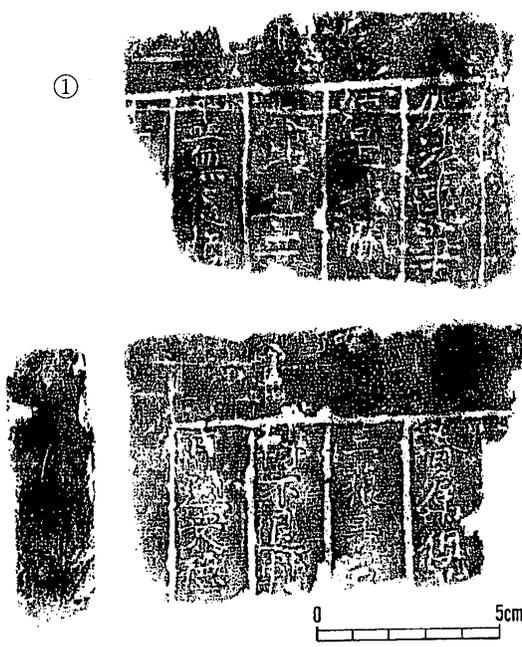
と、表面に
 「妙法蓮華……」
 「如是我聞……」
 「大比丘衆……」
 「盡無復煩……」
 とあり、裏面には
 「眷属俱……」



大伏蔵佐谷瓦経塚



第二号
 指 定 書
 一名 称、頁数
 板野蔵佐谷瓦経 一帖
 二 構造形式は寸法その他特徴
 瓦製破片、原型は寸法は六寸三分
 寸五分ありと考えられる
 天仁二年七月五日の銘文は現存瓦経とし
 ては鳥取県出土の延久三年に次ぐもので非
 常に貴重なるものである
 右のものと文化財保護法第八条の
 規定に基づき徳島県指定有形文化財として指定する
 昭和五十七年七月十八日
 徳島県教育委員会



「三藐三……………」

「轉不退轉……………」

「所殖衆徳……………」

とある。これはいうまでもなく『妙法蓮華經』卷第一「序品第一」の冒頭の部分であり、瓦経は一枚につき十七字詰、八行に篋描きで書写され、焼成されている。

次に②の破片をみると、表面に

……………序……………」

……………時佛……………」

……………万……………」

とあり、裏面には

……………提……………」

……………法輪……………」

……………常……………」

とある。これは①の瓦経破片の下に続く部分であることがわかる。

さらに③をみると、表面に

……………(空白)……………」

……………中與……………」

……………已……………」

……………在……………」

とあり、裏面には

……………多羅……………」

……………辯才……………」

……………諸佛……………」

……………修身……………」

とある。以上は三個体の破片であるが、經典に同定し、復原してみると、本来は一枚の瓦経であったが、破片となって別々の個体となっていることがわかる。そこで、原形の一枚に書写された瓦経の経文は次の如くである。

(ゴチック体の文字は瓦経から判読できる文字。以下同じ。)

〔表〕 妙法蓮華經序品

如是我聞一時佛在王舍城耆闍崛山中與

大比丘衆万二千人俱皆是阿羅漢諸漏已

盡無復煩惱逮得已利盡諸有結心得自在

其名曰阿若憍陳妬摩訶迦葉優樓頻螺迦

葉迦耶迦葉那提迦葉舍利弗大目犍連摩

訶迦旃延阿菴樓駄劫賓那憍梵波提離婆

多畢陵伽婆蹉薄拘羅摩訶拘締羅難陀孫

〔裏〕

陀羅難陀富樓那彌多羅尼子須菩提阿難

羅睺羅如是衆所知識大阿羅漢等復有學

無学二千人摩訶波闍波提比丘尼與眷屬

六千人俱羅睺羅母耶輸陀羅比丘尼亦與

眷屬俱菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅

三藐三菩提不退轉皆得陀羅尼樂說辯才

轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛

所殖衆德本常為諸佛之所稱歎以慈修身

ところで、『阿州大伏旧釈迦堂跡出土瓦経拓』(以下「浪花拓本集」と略す)をみると、三二頁と四四頁の下端、そして四三頁の上段に掲載された三片は同一個体であったことが判明した。さらに三二頁の資料は上が裏面で、下が表面となっており、四四頁下段の拓本も、上が裏面、下が表面となっている。

復原作業のなかで特に問題はないが、①の破片の表面一行目は、②の破片によって『妙法蓮華経序品』とあったことがわかるし、②の破片の三行目は『大正新脩大藏経』では「萬」とあるところを瓦経では「万」という略文字を使用している。

次に瓦経の原形を復原すると、縦は表面一行目の「妙法蓮華」の四文字が五・一セで、一行十七字とし、上端縁一・八セ、下端縁一・七セを加えると、約二五セとなる。罫線の一行の幅が二・一セ、八行、左右の縁幅が一・一セあるから横幅約一九セ、厚さは約二・一セとなる。

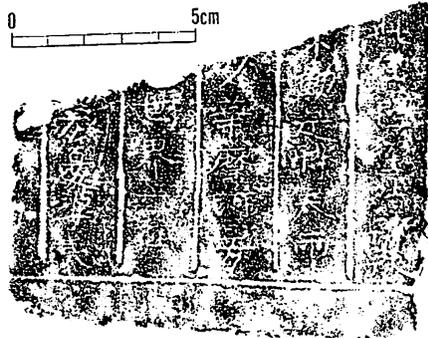
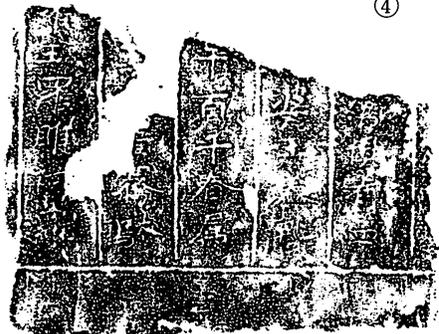
以上のようにこの①、②、③の資料は経文を同定し、復原することによってはじめて本来は一枚の瓦経であったことが判明し、これによって瓦経の生命はよみがえるものと考ええる。

④の破片を同定してみる。表面に

..... 属俱有四」

..... 婆王美乾」

④



..... 千百千眷属」

..... 騫駄」

..... 王羅睺阿修」

とあり、裏面に

..... 此経已結加趺」

..... 不動是時天雨」

..... 華摩訶曼」

..... 世界六種」

..... 塞憂婆夷」

とある。これは、前同様「序品第一」の三枚目にあたる。以下経文を復原する。

〔表〕

持法緊那羅王各與若干百千眷屬俱有四
乾闥婆王樂乾闥婆王樂音乾闥婆王美乾
闥婆王美音乾闥婆王各與若干百千眷屬
俱有四阿修羅王婆雅阿修羅王佉羅鷲馱
阿修羅王毘摩質多羅阿修羅王羅睺阿修
羅王各與若干百千眷屬俱有四迦樓羅王
大威德迦樓羅王大身迦樓羅王大滿迦樓
羅王如意迦樓羅王各與若干百千眷屬俱

〔裏〕

韋提希子阿闍世王與若干百千眷屬俱各
禮佛足退座一面爾時世尊四衆圍遶供養
恭敬尊重讚歎為諸菩薩說大乘經名無量
義教菩薩法佛所護念佛說此經已結加趺
坐入於無量義處三昧身心不動是時天雨
曼陀羅華摩訶曼陀羅華曼殊婆華摩訶曼
殊沙華而散佛上及諸大衆普佛世界六種
震動爾時会中比丘比丘尼憂婆塞憂婆夷

ところで前掲の序品の一枚目はよいとして、二枚目からこの三枚目に
続くところに不可解な問題がある。それは次の点である。

序品一枚目の裏面最後の行は先きに挙げた通り
所殖衆徳本常為諸佛之所称歎以慈修身
である。すると二枚目の表面最初の行は

善人佛慧通達大智到於彼岸名称普聞無

ではじまる。そしてこの三枚目の表面最初の行は

持法緊那羅王各與若干百千眷屬俱有四

ではじまる。そうすると二枚目の裏の最終行は

法緊那羅王妙法緊那羅王大法緊那羅王

となる。そこで二枚目の表面最初の行から、裏面最後の行までを割り付
けてみると、一行十七字の文字の数は合致するが、全体で十七行となる。
勿論、表裏対応して書写されるという原則がある。この方法によると表
面八行、裏面八行でなければならず、十七行という奇数行は生れない。
しかし実際には二枚目は十七行であって一行だけ多い。結果的に表裏ど
ちらかで八行と九行ということになるが実際にはそのようなことは起こ
らないし、普通では考えられない。この瓦経片の場合、その理由は全く
わからない。

若し考えれば二枚目の瓦経を書写する作業のなかで、誤って一
行分だけ誤って脱行した可能性がある。そこで思い出される一例は、以
前、愛知県碧南市在住の水野孝文氏所蔵の瓦経片の復原を行っていたと
き、書写中に一行脱落していることがみつかった。そこで写経者はこの
瓦経では縁の欄外に一行分を追記した例があった^③。この大伏瓦経の場合
も一行脱落ということを考えれば表裏十七行という矛盾は解決できるが、
それ以外には判断がつかない。若し将来序品の二枚目に相当する資料が
見つければその時点を検討する必要のあることを附言しておきたい。誤
りは誤りであっても、千数百年を経過しても指摘されるということを肝
に銘じておきたい。

次に、裏面の二行目は『大正新脩大藏経』すなわち『麗本』では「礼

佛足退座一面」で改行され、「爾時世尊」から三行目になり、経文の意味からしても改行した方がよい箇所であるが、この瓦経では改行していない。

このことは、現物は存在しないがこの瓦経の前の二枚目においても、文字数の計算からすれば、表面から裏面に続く位置にくる「如是等菩薩摩訶薩八萬人俱」で改行し「爾時釈提恒因」となるところ、改行しないで書写されているらしい。それは改行しないで以下書写を続けると二枚目の終りから三枚目へ矛盾なく続くことになるからである。これを改行して書写した場合は続かなくなる。

第三に裏面四行目の「加」は、東博本、宮内庁本、明本では「跏」、最終行の「憂」は『大正大藏経』では「優」であるが、共にこれらの文字からだけでは書写の原典を明確にすることはできないであろう。

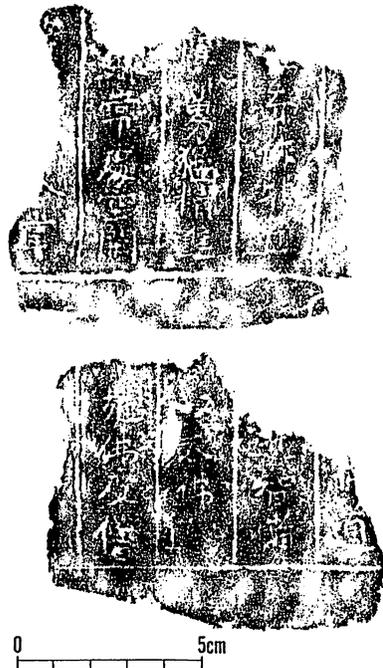
次に、この瓦経の原形の復原は、表面四行目の「王羅睺阿修」の五字が六・一_ナ、下端の縁が一・七_ナであるから上下共に同じとみて計算すると縦全体で約二〇・七_ナとなる。横は罫線の幅が二・一_ナ、縁が〇・八_ナであるから、全体として約十八・四_ナと推計することができる。

なお、この瓦経の現品は西室苑にはなく、『浪花拓本集』では五七頁に掲載されているが上は裏面であり、下が表面で上下逆になっている。

⑤は表面に

- ……而作比丘
- ……勇猛精進
- ……常處空閑

⑤



……合掌
とあり、裏面に

- ……道
- ……□智者
- ……□求仏道
- ……施佛及僧

とある。これは「序品」の「以偈問曰」の中間に相当する部分である。以下この部分を復原すると次の如くなる。

- 〔表〕 剃除鬚髮 而被法服 或見菩薩 而作比丘
 獨處閑靜 樂誦經典 又見菩薩 勇猛精進
 入於深山 思惟佛道 又見離欲 常處空閑
 深修禪定 得五神道 又見菩薩 安禪合掌

以千萬偈 讚諸法王 復見菩薩 智深志固
 能問諸佛 聞悉受持 又見佛子 定慧具足
 以無量喻 為衆講法 欣樂說法 化諸菩薩
 破魔兵衆 而擊法鼓 又見菩薩 寂然冥默

〔裏〕

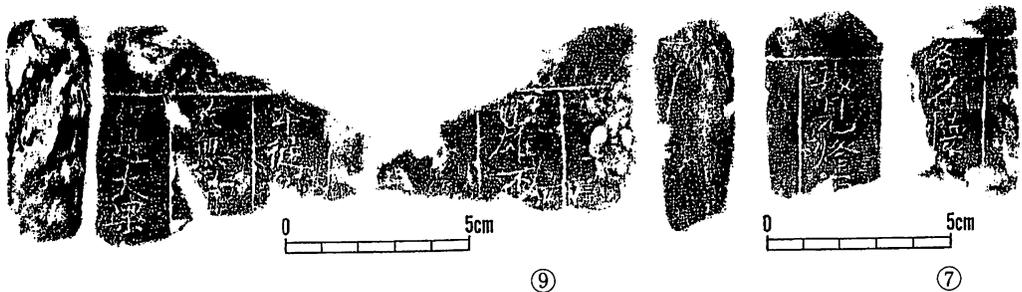
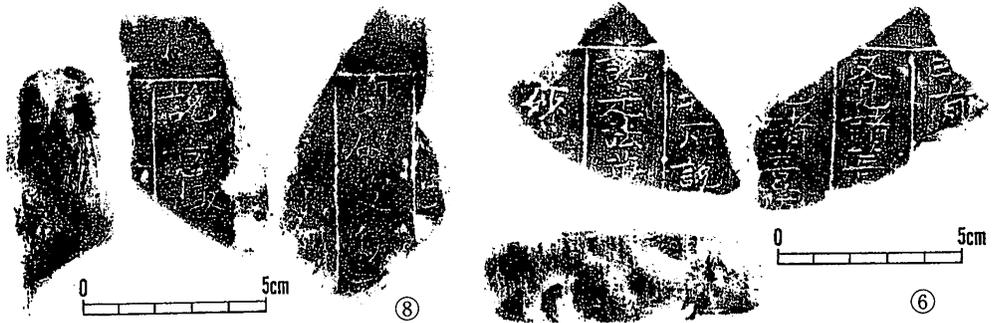
天龍恭敬 不以為喜 又見菩薩 處林放光
 濟地獄苦 令人佛道 又見佛子 未嘗睡眠
 經行林中 勤求佛道 又見具戒 威儀無欲
 淨如宝珠 以求佛道 又見佛子 住忍辱力
 増上慢人 惡罵捶打 皆悉能忍 以求佛道
 又見菩薩 離諸戲笑 及癡眷屬 親近智者
 一心除乱 撰念山林 億千萬歲 以求佛道
 或見菩薩 餚餚飲食 百種湯藥 施佛及僧

書写上、問題はない。四字一句、四句一行で正しく書写している。

縦の復原は裏面最終行の「施佛及僧」の上の空間の中央から下の野線まで五・〇センチ、上下縁一・六センチを加えて計約二二・二センチ、横は野線が幅二・一センチで八行、左右縁各〇・七センチを加えて推計一八・二センチの大きさである。

なお、この破片は『浪花拓本集』の五六頁に集録されたものであるが、現在西室美術館には現品は存在しない。

次に⑥、⑦、⑧、⑨の四片の破片がある。いずれも小破片であるが、実はこれを経典に同定することにより四枚の破片を完全に復原すること



ができる。以下その手順を示す。

まず、⑥についてみると、一方の面に

「或有……………」

「又見佛菩……………」

「……諸菩薩……………」

の三行が読みとれる。その反対の面をみると、

「……所説……………」

「説是法華……………」

「□妙……………」

の三行が判読できる。これを一行十七字詰、八行の経典にあててみると、「序品第一」に相当する箇所であることがわかる。

次に⑦の破片を検討すると、一方の面に

「各各懷……………」

の一行三文字が読みとれる。そしてその反対の面に

「我見燈……………」

の一行三文字が判読できる。この一行は一枚の瓦経の表面の最初の一行であり、裏面の一行は一枚の瓦経の最後の行の上部の三文字であることがわかる。したがってこの間は表面八行、裏面八行の十六行であることになる。

しかも、これを復原することによって、先きの⑥の瓦経の次の瓦経に相当することが判明する。

さらに⑧の破片をみる。一方の面に

「聞辟支佛……………」

の一行四字の文字がある。これと反対の面に

「説意趣……………」

の一行分三文字が読みとれる。この僅かに残存する文字を手掛りに一枚の瓦経を復原すると、これが先きの⑦の瓦経に続くものであることが分った。

⑨の破片をみると、一方の面に

「□□……………」

「世雄不……………」

「……………」

の文字が読みとれる。但し文字の読めるのは終りから二行目の三文字だけである。ついで反対の面をみると

「本従……………」

「於無量……………」

「如是大果……………」

の三行の文字を知ることができる。これは裏面にあたる。そこで僅かな文字ではあるが一行十七字詰、表裏共に八行で復原すると、これがまた、先きの⑧のに続く瓦経の一部であることが判明した。

以上のことから、この連続する四枚の瓦経を復原すれば次のようになる。

⑥〔表〕

又見所如來 自然成佛道 身色如金山 端嚴甚微妙
如淨琉璃中 內現真金像 世尊在大眾 敷演深法義
一一諸佛上 聲聞眾無數 因佛光明照 悉見彼大眾
或有諸比丘 在於山林中 精進持淨戒 猶如護明珠
又見諸菩薩 行施忍辱等 其數如恒沙 斯由佛光照
又見諸菩薩 深入諸禪定 身心寂不動 以求無上道
又見諸菩薩 知法寂滅相 各於其國上 說法求佛道
爾時四部眾 見日月燈佛 現大神通力 其心皆歡喜

〔裏〕

各自相問 是事何因緣 天人所奉尊 適從三昧起
讚妙光菩薩 汝為世間眼 一切所歸信 能奉持法藏
如我所說法 唯汝能證知 世尊既讚歎 會妙光歡喜
說是法華經 滿六十小劫 不起於此座 所說上妙法
是妙光法師 悉皆能受持 佛說是法華 令眾歡喜已
尋即於是日 告於天人眾 諸法實相義 已為汝等說
我今於中夜 當入於涅槃 汝一心精進 當離於放逸
諸佛甚難值 億劫時一過 世尊諸子等 聞佛入涅槃

⑦〔表〕

各各懷悲惱 佛滅一何速 聖主法之王 安慰無量眾
我若滅度時 汝等勿憂怖 是德藏菩薩 於無漏實相
心已得通達 其次當作佛 號曰為淨身 亦度無量眾
佛此夜滅度 如薪盡火滅 分布諸舍利 而起無量塔

⑧〔表〕

比丘比丘尼 其數如恒沙 倍復如精進 以求無上道
是妙光法師 奉持佛法滅 八十小劫中 宣法華經
是諸八王子 妙光所開化 堅固無上道 當見無數佛
供養諸佛已 隨順行大道 相繼得成佛 轉次而授記

〔裏〕

最後天中天 號曰燃燈佛 諸仏之導師 度脫無量眾
是妙光法師 時有一弟子 心常懷懈怠 貧者於名利
求名利無厭 多遊族姓家 棄捨所習誦 廢忘不通信
以是因緣故 號之為求名 亦行眾善業 得見無數佛
供養於諸佛 隨順行大道 具六波羅蜜 今見釈師子
其後當作佛 號名曰彌勒 广度諸眾生 其數無有量
彼佛滅度後 懈怠者汝是 妙光法師者 今則我身是
我見燈明佛 本光瑞如此 以是知今佛 欲說法華經

⑧〔裏〕

今相如本瑞 是諸佛方便 今佛放光明 助發實相義
諸人今當知 合掌一心待 佛當雨法雨 充足求道者
諸求三乘人 若有疑悔者 佛當為除斷 令盡無有餘
妙法蓮華經方便品(第二)
爾時世尊從三昧安詳而起 告舍利弗諸佛
智慧甚深無量其智慧門難解難入一切聲
聞辟支佛所不能知所以者何佛曾親近百
千萬億無數諸佛盡行諸佛無量道法勇猛

〔裏〕

精進名称善聞成就甚深未曾有法隨宣所
說意趣難解舍利弗吾從成佛已來種種因
緣種種譬喻廣演言教無數方便引導衆生
令離諸著所以者何如來方便知見波羅蜜
皆已俱足舍利弗如來知見廣大深遠無量
無礙力無所畏禪定解脫三昧深入無際成
就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別
巧說諸法言辭柔軟悅可衆心舍利弗取要

⑨〔表〕

要言之無量無辺未曾有法佛悉成就止舍
利弗不須復說所以者何佛所成就第一希
有難解之法唯佛與佛乃能究盡諸法実相
所謂諸法如是相如是性如是体如是力如
是作如是因如是縁如是果如是報如是本
末究竟等爾時世尊欲重宣此義而説偈言
世雄不可量 諸天及世人 一切衆生類 無能知佛者
佛力無所畏 解脫諸三昧 及佛諸余法 無能測量者

〔裏〕

本從無數佛 具足行諸道 甚深微妙法 難見難可了
於無量憶劫 行此諸道已 道場得成果 我已悉知見
如是大果報 種種性相義 我及十方佛 乃能知是事
是法不可示 言辭相寂滅 諸余衆生類 無有能得解

除諸菩薩衆 信力堅固者 諸佛弟子衆 曾供養諸佛

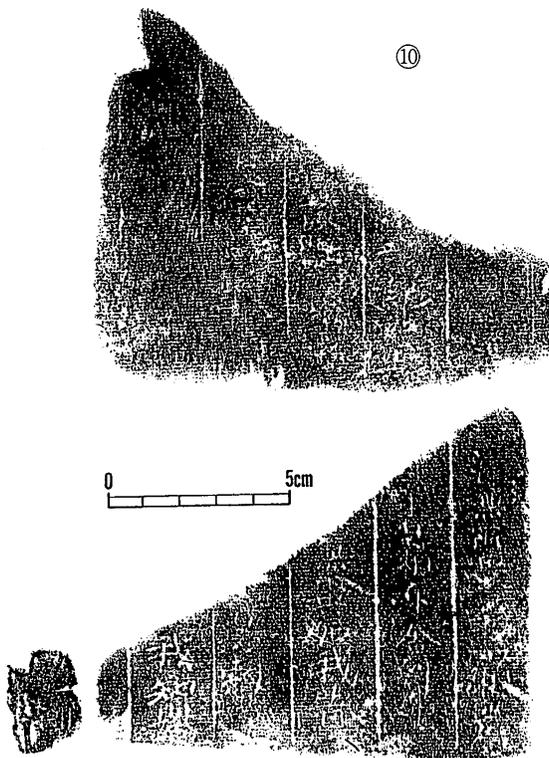
一切漏已盡 住是最後身 如是諸人等 其力所不堪

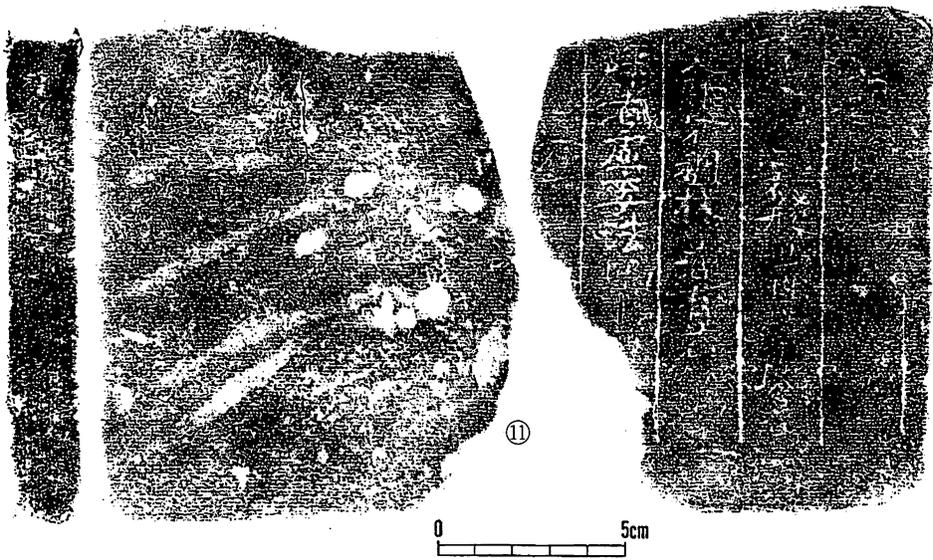
假使滿世間 皆如舍利弗 盡思共度量 不能測佛智

正使滿十方 皆如舍利弗 及余諸弟子 亦滿十方刹(以下略)

となる。そしてこの四枚は一字一行の問題もなく、連続することになっ
て正確に書写されたことを示している。但し何れも小破片であるから単
独では単なる小破片としての価値しかないが、こうして残存の文字を頼
りに復原すると、その小破片が大きな価値を生み出すことになる。

⑩





なお、一枚の瓦経の大きさは、⑧の表面の「聞辟支佛」の四字が五・一セ、上下の縁計三セを加えると全体で約二〇・四セ、幅は一行の罫線が二・一セで、八行、それに左右の縁計約三セを加えると約一九・八セとなる。厚さは約二セある。

次に⑩、⑪の破片をみる。

まず⑩の資料は「浪花拓本集」三十二頁に挙げられた焼成の鈍い破片で、文字の彫りも浅く、判読できないものもある。ところで、一方の面(表面)をみると、

..... (不明)

..... 我記

..... 故此

..... (不明)

..... (不明)

であり、五行あるが殆んど読めない。次に他の面(裏面)をみると辛うじて

..... 無所畏我以相嚴

..... 相印舍利弗

..... 異如我昔

..... 若我

..... 我知此

と読める。これを經典に同定すると『妙法蓮華經』の「序品」の偈文にあたる。

もう一点、⑩は『浪花拓本集』四〇頁に挙げられたものでその破片をみると、一方の面（表面）では

……………因縁……………

……………微形……………

……………入邪見稠林若有……………

……………深者虚妄法……………

と読める文字がある。反対側の面（裏面）は文字の彫りが浅く、焼成も不良で正確に文字を読むことはできない。ただ、この経文も偈文であり、判読した文字をもとに復原し割り付けてみると、先きの⑩の資料に続くことが分かる。そこで、この二片に書写された經典の箇所を四句一行、表裏共八行で表記し、該当する部分の文字を表記すると次の如くなる。

⑩〔表〕

有佛子心淨 柔軟亦利根 無量諸佛所 而行深妙道
為此諸佛子 說是大乘經 我記如是人 來世成佛道
以深心念佛 修持淨戒故 此等聞得佛 大喜充遍身
佛知彼心行 故為說大乘 聲聞若菩薩 聞我所說法
乃至於一偈 皆成佛無疑 十方佛土中 唯有一乘法
無二亦無三 除佛方便說 但以假名字 引導於衆生
說佛智慧故 諸佛出於世 唯此一事實 余二則非真
終不以小乘 濟度於衆生 佛自往大乘 如其所得法

〔裏〕
定慧力莊嚴 以此度衆生 自證無上道 大乘平等法
若以小乘化 乃至於一人 我則隨慳貧 此事為不可

⑪〔表〕

若人信帰佛 如來不欺誑 亦無貧嫉意 斷諸法中惡
故佛於十方 而独無所畏 我以相嚴身 光明照世間
無量衆所尊 為說実相印 舍利弗當知 我本立誓願
欲令一切衆 如我等無異 如我昔所願 今者已滿足
化一切衆生 皆令人佛道 若我遇衆生 盡教以佛道
無智者錯乱 迷惑不受教 我知此衆生 未曾修善本

〔裏〕

堅著於五欲 癡愛故生惱 以諸欲因縁 墜墮三惡道
輪廻六趣中 備受諸苦毒 受胎之微形 世世常增長
薄德少福人 衆苦所逼迫 入邪見稠林 苦有若無等
依止此諸見 具足六十二 深著虚妄法 堅受不可捨
我慢自矜高 諂曲心不実 於千萬億劫 不聞佛名字
亦不聞正法 如是人難度 是故舍利弗 我為設方便
說諸盡苦道 示之以涅槃 我雖說涅槃 是亦非眞滅
諸法從本來 常自寂滅相 佛子行道已 來世得作佛

我有方便力 開示三乘法 一切諸世尊 皆說一乘道
今此諸大乘 皆心除疑惑 諸佛語無異 唯一無二乘
過去無數劫 無量滅度佛 百千萬億種 其數不可量
如是諸世尊 種種緣譬喻 無數方便力 演說諸法相
是諸世尊等 皆說一乘法 化無量衆生 令人於佛道
又諸大聖主 知一切世間 天人群生類 深心之所欲
更以異方便 助顯第一義 若有衆生類 值諸過去佛

若聞法布施 或持戒忍辱 精進禪智等 種種修福慧

以上の如く書写は正しく行われており、特に問題は見当らない。

原形の大きさの推定は、五字一偈の大きさが五・一センチ、それに間隔三箇所各〇・五センチ、上下両縁各一・五センチを加えて約二五センチ、幅は罫線一行が二・一センチ、八行に両縁共〇・五センチを加えると約一七・八センチとみることが出来る。厚さは一・八センチである。

小 結

以上、大伏出土の瓦経片のうち『妙法蓮華経』「序品第一」に相当する十一点について同定し、復原を試みた。結果として大伏瓦経は『法華三経』を書写したものであり、そのうち開経の『無量義経』と結経の『佛説観普賢菩薩行法経』について復原はすでに発表してある。今回は本経の『妙法蓮華経』の「序品」を取扱ったが、法華経も一行十七字詰、表裏共八行の原則で製作されたものである。

今回試みたなかで資料④ではその前の③に相当する部分の一枚が表裏計十六行でなければならぬところ十七行でありどこかで誤っていること、あるいは破片そのものは極めて小さく、数行若しくは数字しか残存しないが、①、②、③は現存は三個の破片となっているがもと一個体であったこと、⑥、⑦、⑧、⑨は連続した瓦経の一部であること、⑩と⑪も残存状態は悪いが連続する二枚の破片であることが判明した。これは破片を接着することによって得た結果ではなく、経文との対比によって判明したことであり、結果として小さな破片の存在価値を見出したこと

になる。こうしたことが瓦経の研究につながるものと確信する。

注

- ① 復原には『大正新脩大藏経』「法華部」によった。
② 浪花勇次郎編『阿州大伏旧釈迦堂出土瓦経拓』 徳島県出版文化協会 昭和四十八年七月

- ③ 網干善教「瓦経の復原とその考察」『鷹陵史学』第六号 一九七九年十二月

- ④ 網干善教「徳島県大伏旧釈迦堂出土瓦経片の復原研究―無量義経について―」千葉乗隆博士還暦記念『日本の社会と宗教』昭和五十六年十二月
網干善教「徳島県大伏旧釈迦堂出土の瓦経片の復原研究(二)―佛説観普賢行法経について―」『関西大学考古学資料室紀要』第一号 昭和五十九年三月

網干善教「阿波国出土瓦経片の積聚―散在する資料の集録と復原―」『関西大学博物館紀要』創刊号 平成七年三月